

2015～2016年度 R.I.テーマ  
世界へのプレゼントになろう

R.I.会長 K.R. "ラビ" ラビンドラン

事務所 飯田市通り町4-1293-1

☎23-3430 FAX23-3433

URL:<http://iidarotary.com/>

E-mail:[iidaro@titan.ocn.ne.jp](mailto:iidaro@titan.ocn.ne.jp)

例会日 毎週水曜日 PM12:30～13:30

例会場 シルクホテル ☎23-8383

会長 外松 秀康 幹事 木下 伸二



## 会 報

2015.7～2016.6 6  
**MONTHLY REPORT**

6月号

# 60年の感謝から奉仕の広がりへ



「いずれがアヤマかカキツバタ」という慣用句がありますが、なかなか見分けがつかないのがハナショウブを含めたこれらの花ですね。写真はハナショウブと自分では判断しました。アヤマの花色は紫ですが、ハナショウブは紫だけでなく白、桃、青、黄などがあり、咲く時期もアヤマ、カキツバタが5月であるのに対しハナショウブは6月です。昨年6月に飯田山本の「スイートガーデン」を訪れてみると見事なハナショウブが咲き乱れておりました。

6月は雨の季節、雨粒を付け、しっとりとした花々には心癒されます。

(撮影・文 加藤優治)





私のこの一冊

『天才』

幻冬舎 石原慎太郎 著

この本は若かりし頃、田中角栄を金権政治と批判した石原慎太郎が、田中角栄になりすまして書いた本であり、「一人称俺」文学家の書いたフィクションである。

1990年代には衆議院議員石原慎太郎は、田中角栄のアメリカとのやり取り、日本列島改造論の先見性、最終的にはばらまき政治すら認めている。ましてや田中派にいたら、自分が自民党総裁になっていたかもしれないとか、都政ももっとうまくいったという。つまり田中角栄は自分より優れた政治家であると認めている。

角栄の生い立ち、新潟で臨時公務員として働き、東京に出て会社設立、成功を収めている。その職業観は両親特に母親譲りである。その後政治家になるべく選挙を行うが、何もせず落選。二回目の選挙当選している。その後自分も含めて身内の選挙は負けない。幾多の挫折を乗り越えて、尋常小学校上がりの総理大臣に成り上がっていく過程も明快に書かれている。特にエリート大学出身の官僚といかに対峙していくのか、総理大臣佐藤栄作との駆け引きはとても興味深いところだ。大平正芳総理を惜しむなど、どの人に力があるか見分ける力、人を惹きつける力、

松澤 徹

好機を見極める力に長けていたことを感じる。

一方、女性に関することは角栄以上に面白く書かれている。許嫁がいたこと、「サンバンサン」との清純な関係。東京での出戻り年上女房との結婚。奥さんからは自分をずっと正妻として認めるように約束されて結婚している。一番大事にしたのが孫との時間であるが、誰ひとり政治家を目指さなかったことは、さぞ残念だったことだろう。秘書に迎えた佐藤昭、榎本千恵子の蜂の刺し証言で、ロッキード裁判で有罪になったことは、どう理解すればいいのか。

最後に神楽坂の芸者とその間に出来た2人の息子のことには、随分と多くの量が書かれている。この本の最終は臨終であるが、ずっと彼女らとのやり取りに終始しているのは文学者石原慎太郎らしいと思った。

以上「田中角栄100の名言」と合わせて読んだ『天才』の感想でした。時間があったら読んでみてください。



私の趣味



I like...

早いもので入会4年目を迎えた小林由孝です。若い頃は勢いに任せて海外への一人旅や大型バイクでのツーリングなど気ままな趣味を謳歌したものです。今では時間的・経済的なプレッシャーもあり、すっかり無趣味な人間ですが、あえて言えばただ一つ、家具の鑑賞を密かな楽しみにしています。

きっかけはアメリカへの旅行でした。建築家ル・コルビジェがデザインしたという「LC2ソファ」の原型をニューヨーク近代美術館(MoMA)で見たとき、そのシンプルな直線が創り出す造形美にはアートに疎い私も思わず惹きこまれたものです。現在、世界中のメーカーが復刻版を製造していますが、自分の財布の薄さと「憧れは憧れのままだが美しい」という先人の言葉(?)に従い、現在のところ購入には至っていません。

ご存じの方も多い「ノグチコーヒーテーブル」の復刻版は15年ほど前に購入しました。たった一人で組み立てた時には、厚さ19mmの強化ガラス天板のあまりの重さに絶望感すら覚えたことを思い出しますが、2つの脚の絶妙なバランスで支えられた形状は力強くシンプルで、鬼オイサム・ノグチ自身が「最も成功したインダストリアル・アート」と称した美しさがあります。

日本人の父と米国人の母の非嫡出子としてロサンゼルスで生まれた日系米国人彫刻家イサム・ノグチ。決して幸福とは言えない出生と実父との愛憎、複雑な時代背景に翻弄された彼の生

涯には孤高の影がついて回ったと言います。一方でノグチへの援助を惜しまなかった陶芸家 北大路魯山人や、数年にわたる山口淑子(李香蘭)との結婚生活など、ノグチは人々を引きつけてやまない一面も持ち合わせていたようです。そんな聞きかじりの知識でこのテーブルを眺めると、シンプルかつダイナミックに見えて、どこか不器用で寂しげなノグチの人となりが透けて見えてくるような気分になります。作家たちの人間性を夢想するのも、家具鑑賞の大いなる楽しみです。



今年度、最終号をお届け致します。皆様のご協力により無事6回発行することが出来ました。勝手に内容を企画し、原稿を依頼させていただきましたご無礼に対し、快くお引き受けを頂きましたこと感謝申し上げます。今後もマンスリーよろしくお願い致します。(クラブ広報委員長 中村洋次朗)